中川根ふる里通信

＝ 第87号 ＝

中川根ふる里通信
昭和61年4月20日創刊
編集・発行・連絡先
〒428-0313 静岡県
榛原郡川根本町上長尾839-6
TEL 0547, FAX 0547
56-0015　56-0020

智者山より寸又川
源流の山々を望む

↑秋、中央に沢口山、前黒法師岳、不動岳・合地山など

上岸より朝日岳を望む
スケッチ　小金井市　森田雅文さん
川根本町出身

静岡県知事 川勝平太さん

私達のリーダーは

実は、川根本町立「千年の学校」の名誉学長さん。

七月五日、静岡県知事選挙は、まれに見る大激戦となり、川勝さんが見事当選されました。

衆議員議員選挙の前哨戦とか、全国注目とか、県民の声も聞きとれないほど、めずらしい選挙戦にも感じられましたが新しいリーダーのもと、県民一丸となって、静岡県を日本一豊かな県に致しましょう。〝一に勉強、二に勉強、生涯勉強〟

高郷の山本猪作さん（二百一歳）

元気に清き一票を投じる！

今回の選挙の投票率は61%、そして川根本町の投票率は81%、県下トップとなりました。高齢化率も42%と県下トップを行っていますが、県政参加意識の高い町民が多いことも示されました。写真の山本さん第14投票区（高郷集会所）に、元気な姿を見せ、逢った人々と話をしたり握手ぜめにあったり、大変な人気でした。これまで積み重ねた数々の業績の、町の宝物、猪作さんは、いつも元気です。

『柿下木冠さん「書」を発刊』

川根本町出身、静岡市在住の柿下さんが、新春に、歩んだ人生の記録書、書、柿下木冠一魂の造形を静岡新聞社が発行されました。写真は2005年夏、川根高校体育館にて、「鹿ん舞」「赤石太鼓」に合わせて書作品を制作。「月光若鹿舞う」、故郷は？「足裏の石の感触」と。

神楽フェスティバルとは・・・。

大井川・安倍川流域（中・上流部）は、神楽が盛んな地域で、よく似た形式の神楽が各地域ごとに古来から今日まで脈と受け継がれて、ある特徴（話し言葉）があり、総称して「駿河神楽」と呼ばれています。町内梅澤・田代・徳山の神楽を初め、全国各地の神楽団体が集い、競演することで、伝統文化の魅力を再確認しながら交流の輪を広めるとともに、この神楽フェスティバルに、ふる里出身の皆さん、又川根本町をふる里と想って下さる皆さんの帰郷の場となれば嬉しいです。

＝出演団体（18）＝

- ★ 青森県（八戸市）中居林太神楽
- ★ 山形県（遊佐町）杉沢比山連中
- ★ 神奈川県（厚木市）相模里神楽 垣澤社中
- ★ 長野県（飯田市）遠山霜月祭和田保存会
- ★ 愛知県（東栄町）中設楽花祭り保存会
- ★ 岡山県（高梁市）備中神楽成羽保存会
- ★ 広島県（安芸高田市）梶矢神楽団
- ★ 高知県（梼原町）梼原町津野山神楽保存会
- ★ 熊本県（玉名市）川島神楽連

以上、全国9団体

★＝国指定無形民俗文化財

- ★ 静岡市、清沢神楽保存会
- ★ 〃　井川神楽保存会
- ★ 〃　諸子沢神楽保存会
- ★ 〃　口坂本・横沢・文日神楽保存会
- ★ 伊豆市　加殿神楽保存会
- ★ 島田市　笹間神楽保存会
- ★ 川根本町、梅澤神楽保存会
- ★ 〃　田代神楽保存会
- ★ 〃　徳山古典芸能保存会

以上　県内9団体

はばたく静岡国文祭　ふじのくに　高まる広がる　文化の波
第24回国民文化祭
しずおか2009
平成21年10月24日(土)～11月8日(日)

今秋10月24日～11月8日まで、第24回国民文化祭が、県内各地の会場にて、催されます。
国体が全国民体育の集いに対し国文祭は全国民文化の集いです。
川根本町では、本川根小学校（古くは大井中学、後、本川根南小）会場と、田代大井神社会場にて、10月25日～26日神楽フェスティバルが催されます。
又、10月30日には、静岡市グランシャリ会場にて、★徳山の盆踊り中、ヒーヤイ・荒ん舞が演じられます。どうぞ観に来て下さい。

中野幸逸さんよりの便り

中川根ふる里通信86号を頂きありがとうございました。前回の通信に次号をお楽しみにいて下さいとのメモがありましたので、何を載せられるのかと思っておりましたところ、大きな字で私の短歌を採り上げて下さり、応召の記録も詳しく全文を載せて頂き恐縮致しました。ありがとうございます。特に私の関係した一〇七師団に就ては調査せられ、探究心の強いのには驚かせられました。86号で私は十一月十五日（昭和二十年）シベリヤに送られた――。と書いて終りましたが、あなたの文章を見て（もしよかったら、シベリヤの出来事を教えてほしいとたのみました）一兵卒の意味ない行動ではありますが、シベリヤ抑留生活の事を簡単ながら一通書いてお知らせする気持ちになりました。

ダモイ（家へ）を信じてひたすら耐えた日々――

満州チチハル収容所は、各部隊が集結する所で、一大隊一五〇〇名の部隊が『東京ダモイ』と云って出発するのでした。私もその日を待っていたところ、十一月十五日出発する事になり、毛布三枚と白布地一反が全員に渡されました。本人は下着上下、毛シャツ上下、軍服、外套、手袋に飯盒、水筒が全財産でした。

十五日出発し昼夜溪駅まで行軍して到着すると早速の使役で、食糧の大豆百斤袋（十六貫）＝六〇キロ＝を貨車に積込むのであった。重たいし、転んで麻袋が破れ、大豆が散乱してすべるので歩けないし、大変な事であった。り連兵は鞭を振ってベストラ、ベストラとせき立てるので、まるで戦場であり、死物狂いの作業であった。〝これを成し遂げなければ、東京へ帰れない〟と皆必死で頑張った。

漸く作業が終り、全員貨車に乗り込む、麻袋の上にすし詰めである。一番困ったのは用便で、貨車の戸をわずかに開けて用を済ました。

貨車は東進せず（ハルビン→帰国）せず西に向って走った。東京ダモイではなくシベリヤ行きである。――海ラル拉爾、満州里を通過したのも貨車の中で判らなかったが、二十二日朝、シベリヤ、ハルポン駅に停車し、病弱部隊のみ途中下車となった。迎えのり連兵が来ていい高い山の中腹にある収容所に入った。

各部屋に割当てられて入室し、夜になったところ、電灯が消されてり連兵二人が入ってきて、服装検査が始まった。着のみ着のままに飯盒、水筒と毛布一枚が残された。残りの毛布二枚、白布地は運搬役をさせられたのだ。持ち物は一切取られて私は塩を巾袋で用心に持っていたら、それまで取上げられてしまった。

朝の人員点呼は収容所の玄関前に五列横隊に整列し、日本兵は番号を掛けて人員を掌握するのに、り連兵は一人一手を触れて数えるので、途中で判らなくなり又始めから数え直す事を繰返すので寒い朝は大変な事であった。

二十一年元旦には老い佐が未だ居たので、軍刀で指揮をとり、東方遥拝を行った。そのご少佐はいずこかへ集結したとの事である。

何日の事か、早朝起こされてハルポン駅に行き、材木おろしをやった。一メートル以上の太い丸木で、長さ三、四メートルあったが、道具は何もないので大手袋をはめて凍らないよう作業したが、大手袋をとって指先を凍らせてし

まったので、送者係りをした。凍らないように鼻は常にこする要があった。以前の材木おろしも数回やった。

ハルボン収容所の真冬の頃は毎日死者が出た。病弱部隊だから特に多かったのだろう。埋葬当番の戦友の話によると「凍土で掘れないので雪の中に裸で埋めて来るのだがかわいそうなものだ。ソ連は衣服も足りないので全部裸にしてしまった。墓標も立てるが翌朝行くと住民が持ち去ってなくなっている。」と云っていた。

冬を越したのか外の作業が始まり、鉄棒一本持って建設用地に行き、柱を立てる穴を掘らされた。直径三ロセンチ、深さ五ロセンチ位だったろうが凍っているのでなかなか掘れず一個掘るのが一日のノルマであった。この作業は一日やったのみだ。

次に鉄道建設といってスコップ一挺持って広っ原へ出掛けた。土を掘って盛り上げる作業だった。鉄道建設の道路だっただろうか。何日間働いたか忘れた。――鉄道建設と云えば、バイカル湖西端のタイシェットからさらに奥山へ入り、ハバロスクへ抜ける鉄道建設の山林伐採は大変な事だったようだ。私の本隊はどこへ行ったか知らないが、私がその作業だったら死んだと思う。幸いに病弱部隊に配属されチタ付近の軽い作業だったから生きていられたと思う。

ある時私は熱を発して広い教室のような広間に一人寝かされた事があった。女医が一日に一回舌を見て熱を知るのみで薬もなかったが、三日程で下熱し退室したが、外の作業には出られないので、本部の将校室に当番の手伝いをして、何日間か居た。中尉が二人おった。

夏になってコルホーズ(集団農場)の大豆の除草に行った。長い畦でノルマが与えられた。日本人の癖で一生懸命取るので、早く終り又追加される始末だ。次の日からゆっくり時間内にやろうと申合せた程だった。他の農場へも除草に行った。

煉瓦工場へ廻された事もある。土を練り煉瓦に切って乾かすもので、私は水掛けを受持った。ところがある日、炭鉱作業班に廻され、早夕飯で出発した。夜、穴の中で作業をし朝帰って来るのだ。二日目の早夕飯を食べていると、煉瓦工場のカマンジル(監督)が来て「中野を煉瓦工場へ返してくれ」との事で、炭鉱は休みとなり翌日より又煉瓦工場へ行ったので、助かったと思った。私の真面目な仕事振りがカマンジルに認められたのだろう。

秋めいて来た頃、収容所全員で馬鈴薯の植付をした事がある。地下倉庫に入り馬鈴薯の種薯を食べた時の美味かった事、こんなに美味いものかと驚きながら食べたので、上から早く出せと催促された程だった。種薯は小袋に分け、皆して背荷って長い列をなして山の畑に行き、広い原に植付を行った。九月になって発芽したところ、一ヶ所にまとめて植えたずるい者が見付かってしまい、全員絶食の罰を着たのであった。

九月三十日、チタ第六収容所に移動した。大きな収容所で各所から集まり一、五ロロ人とか二、ロロロ人居ると耳にしたがよく判らない。

ある日、二階の大広間に全員集まり、演芸大会を開催した。各地から有志が出て、それぞれの歌を唄うので、私はわざわざ静岡県の代表ですと、下手な茶切節を唄ったが、誰一人名のってくれず残念だった。静岡県人は居たのか？居なかったのか？又、ある日は全員集合して吉田内閣打倒大会を開催した。ソ連のご気嫌を損じないよう要領よく演説し、引揚促進を目指す者もあり、真面目すぎて、こんなところでやっても何にもならない、という者まで出てきた。私はハバロスクで発行の

日本新聞社に計画させて主催したものと思った。日本新聞も壁に掲示されるので、時々見る事が出来た。

初めて入浴があった。夜になって入浴に出発すると裏口に集まった。一組百名位だったろうか。長い山道を町の方へ出るのであった。何キロか遠いような気がした。途中ですれ違った組もあった。入浴場に着き、焼石に水を掛けて出た蒸気を充満させているという小さな室に数名ずつ入って座り、汗の充分出た所で外に出ておいたらいの水で身体を洗うものだった。日本の風呂桶に入りたいと思った。それでもあかを落して嬉しかった。

第六収容所では作業は少なく、以上の事をやってくれたので、収容所生活が一ヶ年にもなるので、ソ連が慰労会としてやってくれたのだと思った。

十一月二十七日チタ第三八一収容所に移動した。何百人か判らない。移動の度に班長も班員も変るので親友も出来ない。働かされるのみである。

二十二年の元旦には遥拝もなかった記憶。

温かくなり初めた頃、奥山の伐採班が編成され二十名の中に私も指名された。一日登山して午後目的地に到着し、天幕を二張り作り住居とし、一班二班に分れ二班に私は入った。ソ連兵二名は一班の方で寝起きするようだった。白樺を伐って床を作り、お互の毛布を重ね敷いて寝床とした。

夕食が済んだところ「今日は登山のため作業をしなかったから、今から作業する」と云う事で、十ケのピラー（二人切鋸）が並べられ、二人一組でピラー一挺持って出掛けた。私は後になり、弱い者同志で組となり、残りの一番層のピラーを持つ事になった。

作業は大木の伐採が一メートル位の高さで残っているのを伐り返す作業であった。多分雪中に伐採したので一メートル位残ったものと思った。遠くで狼の遠吠も聞こえてきたので、火を大きく焚けと云う事だった。翌日からは立木の伐採が始まった。三、四十年生の松のような木で、三メートル位に切り積込んで置き、枝葉を上から掛けた。

四月半ば過ぎだろうか、下から自動車が登って来て、材木の搬出が始まった。いろいろな下の話が伝えられ、皆、嬉しく聞くのだったが、中でも東京ダモイが始まっているそうな、と云う話は皆を大いに喜ばせ元気付けてくれた。

五月半、愈々東京ダモイと云う事で下山し、三八一収容所に戻った。病人や弱い者、事故を起こした者等は残留になると云われ「赤旗の歌」を唄い得ないと乗船出来ないと云う事で、皆して赤旗の歌の練習に懸命になったものだ。

五月二十六日東京ダモイ出発の日となった。チタ駅に一大隊一五〇〇人が集結し、ソ連司令官より「ご苦労であった。ソ連としては成し得る限りの待遇をした。無事に帰られよ」と別れの挨拶があり、貨車に乗り込んだ。広軌で貨車は大きいので、二段四室とし、一班十名ずつ四十名乗込んだ。ここでは一人でも悪い事をした者が見付かると、その部隊は全員元の作業場に返されると云う事で、皆緊張して入所生活を過ごした。収容所は第一より第四まであり、次々に移り出発となった。

六月九日愈々乗船となった。赤旗の歌を唄いながら、十ホトカ港正門に向い、身体検査で何もかも捨てさせられた。皆の投げる満州紙幣等がヒライと風に吹かれて異い見事だった。岸には興安丸が待っており、タラップを踏み一歩船内に入ると「ここはアメリカの管轄だから、赤旗のアも云うでない」と禁じられた。

出巻し日本海を渡り、六月十二日日本国舞鶴港へ入港し、上陸して久し振りに日本の土を踏んだのだった。

収容所に入り、久しぶりに畳の上に座った事、白米飯に豆腐と葱の味噌汁で食事となり美味かったこと、久し振りに日本人らしい食事で、生きて来て良かったと思った。

身元調査が行われ、シベリヤ収容所の様子等も聞かれた。取調べが済むと一人金三百円の慰労金さが支給されたので大金をもらったと思い、喜んで水羊羹を買ったら一本二十円もとられた。帰りに京都駅で朝食にうどんを買ったら三十円だったし、貨幣価値の異なったのを知った。出発の日が決まったので、汽車の時刻表を調べ「十七日朝十時金谷着く、母迎え来い」と家へ打電した。

満州でドボス収容所から チチハル収容所へ移動する時に汽車で白城子を通過し、焼野原となっているのを見たので、開拓団もやられたのではないか、開拓民はどうなっただろう、妻子は生きているだろうか、初めての満州だから死んだのではないかしと思うようになっていたし、舞鶴で聞いても満州の事は判らない、と言う返事だったので、諦めの気持になっていて打電したのだ。

六月十六日午後舞鶴を出発し、十七日朝金谷駅に着いたところ、妻子が飛びついて来て、三人で抱き合って大声で嬉し泣きに泣いた。外見もなかった。開拓団の人達も数人来てくれ、親戚の人数人など大勢の出迎えを受けた。金谷駅待合室で一休みして妻子等に開拓団の事を聞き、次の大井川線に乗車して帰家した。

家では父母が待っていてくれたので、挨拶したところ、「風呂を沸かしてあるから直ぐ入れ」との事で早速入浴して、シベリヤで一回のサウナだけだったに垢を洗い落しこサッパリした良い気分になった。お風呂から出ると表座敷では出迎えてくれた人達が祝宴を開いていてくれるのですぐ仲間に入り、久し振りに日本酒を飲んで良い気分になり、生きて故郷へ帰る事が出来た有難さ嬉しさをつくづく感じたのであった。

今尚生きている事を有難く嬉しく思います。

頑張ります。

草々

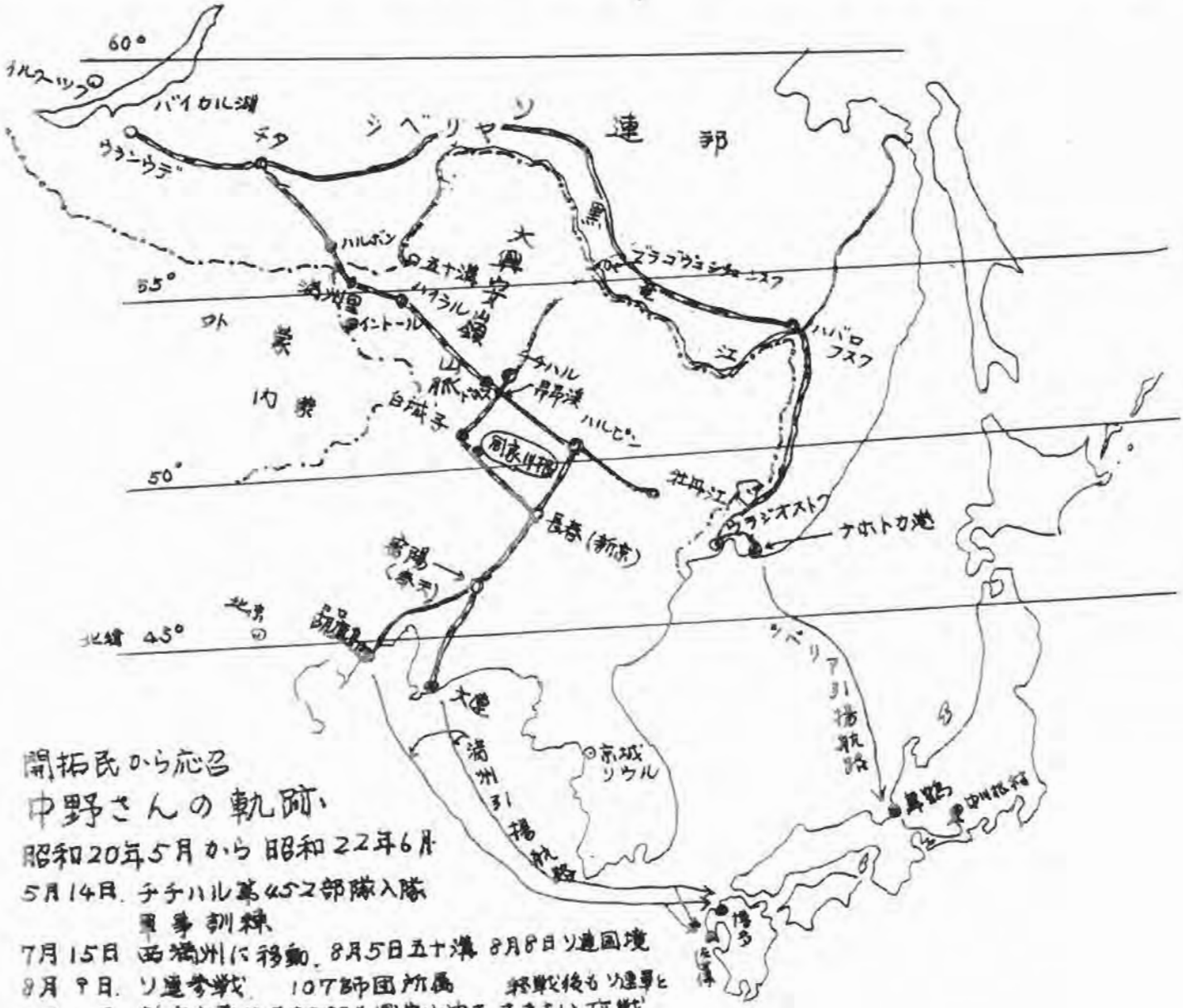
中野さん、ご無理なお願いを叶えて下さって本当に本当にありがとうございました。さぞ気力体力をつかわせてしまった事と心配しております。大切な記録です。読者の皆さんも心してお読みいただければ幸いです。

そして、中野さんはもうすぐ百歳を迎えられます。中野さん万歳。おめでとうございます。

（余録）

推定57万5千人のソ連抑留者（旧満州にて終戦をむかえた兵隊さん達）は、シベリヤへ送られた。21年米ソ協定で始まった引揚は25年4月、戦犯などを残し中絶。（朝鮮動乱勃発、米ソ関係激化）28年11月赤十字社協定で再開し、31年10月の日ソ共同宣言により、戦犯も全員釈放となった。ナホトカから舞鶴へのい連帰還者は45万3847人という。極寒の地での収容所にて、5人に1人は異国の丘に眠っているという。又、引揚船の中やナホトカ収容所にたどりついての故国を目前にしての無念の死をとげた人々も多かったという。

春の彼岸、高柳墓地に、昭和二十年八月十七日、ハイラルにて戦死と書かれた墓標を見ました。中村さんという方でした。終戦後の戦死、若い命を……。残念です。



開拓民から応召

中野さんの軌跡

昭和20年5月から昭和22年6月

5月14日　チチハル第452部隊入隊
　　軍事訓練
7月15日　西満州に移動　8月5日五十道　8月8日ソ連国境
8月9日　ソ連参戦　107師団所属　終戦後もソ連軍と
8月11日　新京方面に退却するも興安山中をさまよい戦
8月29日　イントールに師団集結、ここで敗戦を知る。
9月3日　興安収容所にて病弱部隊に編入
9月10日　ドボス収容所　10月10日チチハル収容所
11月15日　チチハル出発　昌々浪→ハイラル→マンジュリ→ハルボン駅（シベリア）
21年　　ハルボン収容所
9月30日　チタ第6収容所
11月27日　チタ第381収容所
22年
5月26日　チタ駅出発　6月2日ナホトカ到着
6月9日　ナホトカ港出発（興安丸）6月12日舞鶴港入港
6月16日　午後舞鶴出発　6月17日朝金谷駅、下長尾我家へ

ナホトカ収容所にて引揚を待つ兵隊さん

甲板にはあふれるほどの人、人でうまった。

何度・何航路往復したのだろうか

興安丸

新茶レポート～二ロ九版～

ふる里は二番茶も終り、真夏に向けて元気に活動しております。山も畑も緑が一段と濃くなり、ミズキの白い花から、合歓の穂菓子を乗せた様なピンクの花、ヒメシャラや夏椿も盛りで花の移ろいも目に鮮かです。

山からの風に乗ってホトトギスが、オッチャオワッタカ、オッチャヤスイツケカと叫び、アカショービンのケロケロケロ、コロコロコロと奏でる美しい声も聞こえます。

こちらは適度に雨も降って、すごしやすい梅雨時ですが、ことしは梅は不作で、例年の半分も収穫できない様です。梅は、夏を乗り切るパワーを持っていますが、梅不足も心配です。皆さんの所はいかがでしょう。前置きが長くなりました。では始めます。

＊霜害、冷害もほとんどなく、いつになく茶始めが早く、久野脇で四月十九日に初摘みとなりました。例年、町内大井川の下流（久野脇・地名）から上流（千頭・山長井からさらに上流部）へと、順を追って始まって行きますが、四月下旬には、町内、どこもかしこもお茶が始まり、何故か、桜の花が遅れた上長尾地区が、茶始めが遅れました。

＊洗沢（静岡市境）というところへ五月二十五日に訪れた時、そこでは、終盤のお茶摘みを行っておりました。ここは標高八〇〇m、町内最後のホイロ上げ口と、少々大きくなった、つやのある、見るからにおいしそうな茶葉にお目にかかりました。一ヶ月以上もかかり、川根路は茶摘時を終ったのです。

＊ことしも川根本町では、町を上げて、全国茶品評会に出品致します。出品茶園の茶摘みの様子と、周囲の風景を中心に、町の茶畑景観をお届けします。

― 4月29日 ―

農事法人 わらせまにて、

小坂博志さんと堤弘司さんの茶園にて、約5、60人の皆さんで、お茶摘みをしました。原山地区の人達は、結婚、稼いだ娘さん（昔娘さんも含む）も、家族をつれて里帰り、町の方へ移り住んだ人々も茶摘み応援にかけつけて、茶原は大にぎわい。

1針2葉摘みはどうでしたか？

↑、原山集会所、南側の丘陵地は、ヒロオ高原。かつて、果園がつくられたところ、現在は、新しい茶園づくりが始まりました。

川根本町の西南の端、久保尾地区→は、あの山の向こうは、笛河内、川上、（浜松市）。手前から、向井地区、久保尾地区、原山地区に別れ、一番遠くの原山地区は、標高550m。

―― 5月1日 ――

田野口製茶組合にて。

組合長の和田孝久さんの茶園にて、田野口区の皆さんが頑張りました。特に男性のお茶摘みさんが多いのも特徴でした。この日は朝から強い日射しとなり、気候も摘手さんも熱い日となりました。長い畝のはじから、1畝ごとに摘みとって、〜うさぎおいしかの山〜のチャイムが鳴った頃には、広い茶畑のお茶摘みが終了しました。

品評会の茶摘みは特別な摘み方でやります。

- 1針2葉が基本ですが、その茶園の芽の伸び方により、1針1葉になったり、2葉になったり、約5cm以内で、茎を入れない様に心掛けます。
- 摘み取ったら、1回1回ビク(茶籠)に入れ、手のひらに長くとどめません。
- 茶は、折り取り、爪を立ててはいけません。

その様な摘み方ですから、多勢の人の力で、ていねいに、茶摘みに心を集中して、やるのです。

声かけリーダー「1針2葉、気をつけて」の有無で、製茶の良し悪しも決まります。
ここの茶園には、リーダーがいました。

〜摘めよ摘め、摘め
摘まれはならぬ、摘まにゃ
日本の茶にならぬ ――
1葉1葉、摘んでいる時、
―八十八夜の歌―を想い出しながら摘みましたが、懐しい当時の摘み方は、最も品評会に適さない摘み方である事も、ご報告致します。

↑茶畑のすぐ近くに大井川鉄道があり、この日はゴールデンウィークの最中で、SLが長い客車を引きつれて、一杯のお客を乗せて、3往復しました。ちょっと摘みを休んで、シャッターを！(トンネル手前)

↓田野口の徳山に続く高台より西南の展望、田野口から中根橋、上長尾、福島、枝松山、塚の山はるか聖岳山を望む。4月上旬、小学校跡の桜も見えます。

―― 5月9日 ――

尾名久保、土屋鉄郎さん茶園にて昨年"第62回全国茶品評会"にて見事NO1に輝いた土屋さんのお茶摘みは、5月4日予定が芽が伸びず、6日に変更。しかし、6日から、毎部外れの風雨に見舞われ、大変な事になってしまいました。やっと晴れたこの日、寒冷紗を取りのぞいた茶園には、1年かけて丹精込めて育てた見事な新芽がありました。風雨により傷ついた葉も多く、収穫量は、減でしたが今年も期待致しましょう。

今年度も全国茶品評会出品茶園の摘み取り作業が4月26日から始まり5月9日で終了しました。出品茶園の努力と向上心、何といっても"川根茶"を全国に知らせる最大チャンスを受けて下さってありがとうございました。川根本町長の杉山さん（写真→左）も全ての出品茶園に出向いて、激励、お礼を申しておりました。

品評会用のお茶は、摘みとられた後、保冷車に乗せ、全て、地名の農林センターにて、揉まれ、荒茶から、仕上げをし、出品を致します。その事からも、町内各茶園の特徴は、各茶園の管理、育園、そして、茶摘みにより出るのです。今年の発表は、8月下旬、そして、全国お茶まつりの会場にて、表彰されます。（今年の会場は埼玉県入間市10月24日）今年もきっといい成績になると思います。次回号には、又、いいお知らせが出来そうです。

↑土屋さん宅から尾名久保、地区を望む。ここが大蛇伝説、白羽山之神社・秋葉燈籠・など古里

↑土屋さん宅から、茶畑と、三ッ星山を望む麓からの三ッ星山より、ちょっと形がちがう。

川根茶産地も良質茶は高地へ〃天空（てんくう）の茶とは〃

かつて大井川に豊かに水が流れ周囲を潤した時代、冬場は温かく、冷え込む朝は水温の高い川面から霧が立ち込め、夏は涼しい川風が暑さを和げてくれ、お茶など作物に適した自然環境でしたが、川面に水が無くなって早五十年、冬の寒さは県下一、夏の暑さは全国トップクラスになりました。地球温暖化現象だから云々で解決できないほど、大井川周辺の地域は、乾燥が進んでいるのかも知れません。

久保尾、八代郷、中尾、文沢、壱町河内、尾呂久保、西ケ峰など、大井川にほど遠く、支流添い又は山間部、特に標高五〇〇メートル以上の茶園は、全国茶品評会でも最上位・味も、まろやか、色も良く、上質茶がとれます。こちらは温暖化を追い風にして（年間の降雪が激減）なおも森林の持つパワー（森の自然循環〃例、暑い日や乾燥した日々には、樹木が自ら水分を発散する等）もプラスされて、茶園がとても元気です。久保尾地区を中心に天空の茶（お茶を育てる環境がすばらしい）として売り出すことも始めます。それは大きな期待となるでしょうか、主な川根茶畑は、これからどうして畑に潤いをとりもどすかが課題となります。大井川に豊かな流れをとりもどすのか、スプリンクラーを設置するのか、大変な課題ですね。

親友からの便り『茶畑が守る自然の宝庫』

〃周辺の採草地〃茶草場〃のこと、

児童文学出版社アスラン書房の発行者藤本都子さんより〃茶草場〃の切り抜きが送られて来ました。「ちゃくさばって」こちらでは聞きなれない言葉ですが、「あ、そうかー」とその風景がよみがえって来ました。「草刈場」と言った所では。

――内容は、――　二〇〇九年六月二十日　朝日新聞より

お茶畑の近くに広がる「茶草場」を知っていますか？。人の手で維持されている草地は、今ではほとんど消えてしまっただけに貴重な存在になっている。さらに、絶滅が心配される草原性植物を数多く育んでいることが発見された。長年にわたり手入れを続けてきたお茶農家も、そうした意義に気づいていなかったという。

茶草場は、茶畑の周辺に広がる採草地。農家の人達がススキやササなどを刈り取り、「お茶の色や味が良くなるように」と、茶畑に敷く。毎年秋から冬にかけてこの作業が繰り返される。その結果、日当たりの良い草地として維持されてきた。そこには、多様な草花が生息していて、「茶の栽培という農業の営みの中で、自然に里山の草地が守られている。今となっては貴重な事例だ」と、県の環境水田プロジェクトリーダーの稲垣さんは説明された。

人手の入った半自然草地〃茶草場など〃は、五十年位前までは国土の一割以上もあったが、今では2～3%に過ぎない。しかも人家に近い里山地域からはほとんど消えてしまった。それが、静岡県の茶畑の周辺には、かなり残っています。

実際、全国名だたる茶産地で草地が残っている地域は、静岡県と鹿児島県だけで、特に静岡県には、茶畑の半分以上の茶草場があります。

東京のかたすみから（五五）
テレビの始めから終わりまで
知らなくて困ったこと

渡邊寅夫

私は小さな時から人並みの常識がなくて困ることが多かった。五十五年前、放送技術者としてプロの道を歩みだしたときのことである。題名について一話二話と語ってみます。

一、ソフトクリーム

ふる里通信八十一号「デジタルテレビ」でトランジスタの発明がデジタル時代を招いたと述べた。私はトランジスタと言うと、ソフトアイスクリームを思い出すのである。

新卒として、SBS静岡放送に入って間もなくのことである。テレビ発明者の高柳健次郎先生の後継者、堀井隆教授（静岡大学工学部のテレビ研究所長）が、東京の学会の帰りに、大学時代の友人で、私の上司である坂本技術部長を訪ねて、SBS玄関（現在の静岡新聞博物館、東海道線から見える）に現れた。

応接室に招き、教え子の私も恐る恐る同席した。その時の堀井教授の顔は、私たちが講義を受けていた時には見られなかった喜々とした表情があり、私は何かあるな、と直感した。

先生は背広の内ポケットから、白い紙包みを取り出して丁寧に広げ、中に入っている黄金虫のような小さい箱に三本の足がついた物を見せて「これがトランジスタの本物だよ。ソニーの井深さんは、これを使ったラジオを作るんだよ。多分、真空管を使っている今のラジオは時代遅れになると思うね。」

ソニー（当時、東京通信工業）の創始者井深さんから一個だけいただき、わざわざ静岡駅に途中下車して私達に見せに来て下さったのである。

この時の坂本部長と堀井教授の目の輝きと、その時の話しは忘れられない。真空管に代わってこんな小さな物が活躍し、これからの電子、電気、通信界に大変革が起こると言うことであった。彼らは発明にまつわる難しい話をしていたが、私にはよく理解できなかった。彼らはその時すでに、デジタル時代到来の予測もしていたのかも知れない。

トランジスタ

1950年代後半当時の東京通信工業社屋（ソニー提供）
ソニーの創業のころ

数年して当時の東京通信工業の真空管式録音機はトランジスタに代わり、トランジスタ音響器機の全盛期を迎え、そして社名はソニーと変わり、ソニー製品が世界制覇をすることになった。

話は本筋に戻って、トランジスタを見たあとで坂本部長は堀井先生を近くの喫茶店「キンセイケン」（金精軒）へお連れして、ソフトクリームでもどうか、と言う。私は生まれて初めて聞く名前の「ソフトクリーム」とはどんなものか知らなかった。

大井川の山奥で育ったせいか、知らないことや分からないことに会うと、心が動揺して困りきり、黙ってその場をしのぐ癖があった。

その時も黙ってソフトクリームなるものが出てくるのを待った。初めて食べたその美味しさは終生忘れられない。それ以来、ソフトクリームといえばトランジスタ、トランジスタと聞くとソフトクリームを思い出すのである。

後にトンネルダイオード（トランジスタと同様に半導

体部品）でノーベル賞を受けた江崎玲於奈（えざきれおな）氏も若い頃ソニーがトランジスター号品を作るとき勤務しており、彼の貢献は計りしれないものがあったと思う。

二、SBOマシーン

未だこの頃は、静岡にはテレビはなく、野球はラジオ放送だけであった。そんな時、上京してテレビ朝日に移った私はプロ野球中継は初めてで緊張していた。

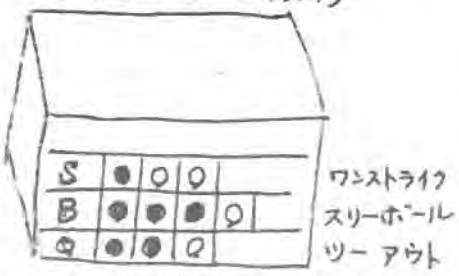
スタジオサブ（副調整室）で準備万端整えたつもりで、私は駒沢球場からの中継映像をながめていた。東映フライヤーズのピッチャー土橋の全盛時代のことである。

その時である。スポーツ担当デレクターが突然現れて「エスビーオー・エスビーオーマシーン」と大声を上げた。私はなんの事やら全くわからなかった。と同時に一瞬分からない事に対し恥ずかしい思いがした。困ったなあーと考え込んでいると、新卒の仙台出身のツネさん（のち東大進学）が、〝これでしょう〟と言って「SBOマシーン」と書いた小さい蜜柑箱のような物をロッカーから出してきた。

私はストライク・ボール・アウトのカウントのコールをテレビ画面に映し出す小道具があることを知らなかった。

（現在は電子化CGされ、イニング・対戦相手・得点・塁上ランナーまで瞬間に出るようになり、五十数年前の蜜柑箱マシーンを知る人はすくないが。）

SBOマシーン模形



＝1ストライク・3ボール
2アウトの場合＝

思えば静岡から上京し、NET（テレビ朝日の前身）の開局に参加した私の初仕事であった。

このSBOの呼称（カウント・コール）は二百数十年前、野球を考えだし始めたアメリカではBSOＩＩシーエンド ワンと言えば、ツーボール、ワンストライクＩＩ日本ではSBOでコール表示している。

私が在職中の三十数年前に、アメリカ方式のBSOのカウントコールに変更と、統一したいという声が上がったが、そのままになっている。日本野球が世界制覇した今、日本に定着しているSBOは変わらないだろうし、野球元祖のアメリカもBSOを変えることはないだろう。

ボール・ストライク・アウトのカウント・コールの順序は今、打者はどれだけ打ちやすい条件にいるか、攻撃側の立場でボールの数を先に言うアメリカ、自分たちは今、どれほど良く守っているか、守備側から見てストライクの数を先に言う日本。両国の違いは国民性 民族性による文化思考の違いであるらしい。

（二〇〇九年四月十日　記）

私の就職を世話して、SBS静岡放送に入れて、引き立って下さった坂本さんと塩井先生に感謝しております。おかげさまで、テレビで主業をたてることができました。ありがとうございました。

参考文献――佐山和夫著
「明治五年のプレーボール」
「ベースボールと日本野球」

曽我さんからの便り

緑豊かな心癒される季節となりました。

ふる里通信86号お送りいただき有難うございました。大変興味深い記事が多く、むさぼる如く読ませていただきました。

昭和二十年、敗戦が間近に迫っていた頃、私は当時の東川根村川長井の国民学校に通う四年生でしたが、村では戦勝を祈念するために近郷近在の神社に詣でることが行われていました。

私の家の番が回ってきましたが、両親のほかは私を頭に六人のこどもばかり、結局私が行くこととなり、数名の近所の大人とともに、小井平、藤川、水川、上長尾、下長尾までのお社をはじからはじまでお参りしました。四年生の子供が炎天のもと、徒歩で下長尾までの往復はかなりの強行軍だった事をいまだに記憶しております。

それからいくばくもなく日本は敗戦をむかえたわけですが、満州でソ連参戦のもとで、八月二九日まで戦わされた中野さんの記事、国の戦争にまきこまれ尊い命を持げられた多数の兵士、開拓者とその家族の霊に自然と頭がさがりました。

千頭の由来となった泉頭四郎兵衛の話は目からうろこの思いで読ませていただきました。

私は五五歳で公務員を退職してから第二の職場として、森林の調査を主とする企業に就職、以後二十年にわたり主として水源涵養保安林の状況調査に従事しました。

国の資金で造成した水源保安林は全国で五十万ヘクタールを超えますが、この静岡県にも一万ヘクタールほどの保安林が全県にわたって分布し、特に安倍川以西の安倍川、大井川、気田川、水窪川、天竜川の流域には、広大な水源涵養保安林が存在しています。

その森林は全て、昭和三六年以降に造成された森で、主として地域の森林組合、一部は地主さんが植え付けから育林の手入れ等行っています。

この大井川流域には、川根本町内の樣原川、寸又川の流域に多く、良く手入れされた美林となっています。とは言え、まだまだ間伐、つる切りなどの手入れが必要であり、山肌に日光が届かないために下草や灌木が育たない地表が裸の山が多く間伐がいそがれます。

この奥山地域の森林全てについて言える問題は、熊、鹿との共存をどのようにはかっていくかと言うことです。特に熊による森林被害は深刻です。私が調査に入った保安林の中には、いずれスギ、ヒノキが全滅する恐れのあるところが幾箇所かありました。

熊の詳しい生態はまだまだ研究途上のようですが、スギ、ヒノキ、カラマツ等は植付けてから二十年ほどすると、樹液の流動性が豊かになり、冬眠から覚めた熊の格好の目標になるようです。

樹液が冬眠覚めで空腹な熊の胃袋を満たすご馳走なのか、別の理由があるのか、論はまちまちですが、はっきりしているのは、樹液をとるために樹肌を剥かれた幹は間違いなく腐るということです。

幹の一部だけならいずれは腐れ個所は樹皮に巻き込まれ、外見では分からなくなりますが、幹の腐れは残りますから、材木としての価値は著しく損なわれます。

剥皮が幹の全円にわたると、翌年春までには樹は枯死し、倒木となります。

林内に倒木が発生し、その近くに被害を受けて弱くなった樹があると、それらが連鎖的に倒れていく現象はスギ、ヒノキの一斉人工林ではままあることです。こうして被害密度の高い森林は山ごと無くなってしまう危険性があるということです。

地域ごとに熊に剥皮されないようにするてだてが種々なされてはいるのですが、いずれもあまり効果はないようです。こうした事から地域によっては、地主が山造りの意欲を無くした所もあるほどです。

熊の好むスギ、ヒノキの森林造成も考え直すときかも知れませんが、いかに共存を図るか研究の進展を願うばかりです。だらだらと長くなりましたが、86号『熊と日本の森』の記事を見て、思いつくままに記しました。

私は、自然の情景描写が鮮烈でかつ豊かな表現の新田次郎の書が好きで、氏の新刊書を待って手に入れていましたが、昭和56年初刷の剣岳点の記を見て、生田信が千頭のノンキ堂の生田さんと知りました。

そのまま時は経過して十年ほど前、接嶋地区の御石神（こがまし）社の祭りを参観し、地元の識者や来賓の方々と一献酌み交わした席で、偶々来賓としていらっしゃっていた町会議員の生田八朗さんとお会いし、色々とお話を伺う機会をもつことが出来ました。いずれにしても、このように素晴らしい足跡を残した人が千頭の出身とのことで、我がことのようにうれしい事です。

とりとめのないことを連ねてしまいましたが、ふる里通信を読ませていただき感じたことを書かせていただきました。

東京都江東区在住　曽我　茂

曽我さん、森林の様子を教えて下さってありがとうございました。「これは原稿ではありません」と書かれておりましたが、ほとんどの人々が知らない事を、曽我さん達が調査された事です。どうしても広く知ってほしいと書かせていただきました。

実は、上の2枚の写真は、熊か鹿の樹木の幹を剥いだ生々しい痕跡と、枯木林の様子を撮ったものです。場所は、山犬饗から蕎麦粒山をこえ、なお北西に伸びた尾根の三ッ谷（みつだに）の手前です。針葉樹のツガ、コメツガ、ハリモミ、モミなど、幼木を残して、全ての針葉樹が立ち枯となっています。幹をまくと枯れます。

上、下、シロヤシオが咲いている様子、遠く聖岳・上河内岳が望めます。

5月23日(土)、千頭山の会5月山行より
山犬段→三ツ合→のこぎり山→千石沢→山犬段、約5時間コース。

今年は7年ぶりにシロヤシオが、びっしり花をつけ、純白な中にも豪華なはなやかな森林を装ってくれました。特に、三ツ合付近の笹地(針葉樹は前ページの様に枯れている)に、枝一杯に花が咲きほこれている様子はとても写真には表せませんが、見て下さい。

＊……＊……＊……＊……＊……＊……

下、大間川最上流下西出川側の、のこぎり山鋸の歯は6～7本、登り下りのはげしい山道です。のこぎりの向こうは水窪の門桁、かつて山越えの道もあり、人の往来もあったそうです。

のこぎり山から千石平へ続く尾根上に立派な天然ヒノキの群生が見られます。幾つの歳月を生きているのでしょうか。

その昔、川根から信州大河原へ続く宮様ロードがありました。そして昭和40年頃、川根から長野県へ通ずる嶺線林道計画がありました。今はとても静かです。下、針葉樹林が消えた後の笹地とバイケイソウ

ポジティブリスト制度のこと

中道正巳

舌を噛む様なカタカナ英語の制度があり、私達の日常の生活に無縁ではない事を知ったのは、ついこの頃の事です。

近頃はフィルム式のカメラが減りましたが、撮影後の映像が反転しているフィルムをネガティブフィルムと言います。これに反し映画のフィルムは、見た目と同じ影像で、ポジティブフィルムと言います。このことをふまえて、ネガティブは否定的、ポジティブは肯定的とする制度と理解していただければと思います。

健康な人が毎日三度摂る食物の中に含まれる残留農薬について、食品衛生法で定めたポジティブリスト制度があります。残留農薬は従来、原則的には規制がなく、残留してはいけないもののみ二八三種をリスト化したもので、いわばネガティブリストの形をとってきました。この制度ではリスト以外の農薬が検出されても規制ができなかったのです。

ところが、平成十五年BSE問題、その後食品表示偽装や食品添加物等、食の安全を脅かす問題が次々と出て来たので食品安全基準法が制定され、それに伴い、食品衛生法も大幅に改正されたのです。

残留農薬については原則的には規制禁止の状態で使用してもよいものをリスト化した形の、ポジティブリスト制度が制定され、平成十八年から施行されています。

現在農薬は八〇〇種以上もあり、おもな食品ごとの基準が設定され、基準値を満たしている食品のみが流通できます。基準値が設定されていないものについては、0.1ppmを一律基準としています。お茶の場合は二六九種あります。

残留農薬は、穀物、野菜、果物など何にでも有りますが、茶については特に関心があります。農薬を使った経験があるからです。

川根で茶に農薬が散布され始めたのは戦後の事です。発芽前に散布する石灰硫黄合剤が主でした。古い茶の葉が真っ白くなります。この薬剤は一八五一年フランスで発明されたもので、うどんこ病に効果があり、殺菌効果もあって現在も使われています。そして昭和三十年頃になると、有機リン剤のパラチオンが使われるようになりました。

徳山に農業研究会が生まれ、その中心的な役割を担ったKさんは、この薬剤を下村地区に率先して散布しました。私も二、三日手伝った事がありましたが、Kさんはその後ガンに冒されお亡くなりになりました。私は目をやられました。太陽が出ている昼が夕方のように見えたので、梳てて鏡を見たら、右目の黒目(瞳)が無くなっていました。角膜表層炎でした。

その頃は計量が曖昧で薬品はリットル表示、容器は木の桶で、一斗・二斗で薬品の希釈倍数が一、〇〇〇倍から二、〇〇〇倍と幅が有る為、大雑把な希釈で尚且つマスク、手袋、防護用具も着衣せず不注意でしたが、この農薬は中毒患者が多く出た為に、昭和五二年に販売中止になりました。当時は強い薬で人体にも影響があるだろう、という程度で、茶葉に残留すると知ったのは、少し後の事です。

残留する単位はppm、これは百万分の一、よく一トントラックに一杯積んだ内の一グラムという表現を使います。茶園で噴霧器で散布したのを吸入した場合は千分の一、残留農薬との差は歴然です。

薬剤の吸入で意外と知られていないのが殺虫剤です。

蚊やハエを落とすフマキラー等、部屋、中で換気もせず噴霧します。対象が蚊、ハエ等で毒性が弱いと思いがちです。殺虫剤は農薬取締法や薬事法の適用を受けない医薬部外品ですが、これらの薬剤はほとんど農薬の効能と同じです。（日本環境衛生センター調べ）皮膚に付いたり、吸収したりは農作業より多いでしょう。

昔も今も変わらないのが女の人の茶摘み姿。日よけ、手拭い、手甲は茶畑の強い紫外線除けの為、この紫外線は農薬を急速に分解します。

残留農薬は無いのに越した事はありません。しかし、現実問題としてすべての食品から残留農薬を無くす事は出来ないのです。農薬はそれを使う人の方が影響を受ける方が多いのですが、それでも作物の育ち具合で使わざるを得ないのです。有機栽培や無農薬栽培がクローズアップされると農薬を使う農家は日陰者扱いの傾向になります。

無農薬栽培を強調するものに、野菜工場の水耕栽培でつくる野菜があります。ある大手鉄鋼メーカーグループは、合併して現在があるのですが、合併で余った土地に工場を作り水耕で野菜づくりを始めた。初めはカイワレ大根でしたが、今はレタスが主です。

この野菜工場は雑菌が入らないよう外気を遮断して自動コントロールの空調、化学肥料を溶かした養液、人工光で栽培します。価格は少し高めですが、無農薬、無菌栽培で洗わなくても食べられると、販売を伸ばしています。

完璧な無菌室、しかし、足らないものがあります。それは二酸化炭素。子供の頃、植物は炭酸同化作用で息をすると教えられた。今は光合成という。二酸化炭素＋水→植物育ち＋酸素。分子記号のない時代に既にこの方程式はありました。CO_2削減が叫ばれる今日、野菜工場ではCO_2を補給しなければ作物は育たないのです。この様な野菜工場は、つまり、非エコロジーの産物なのです。エコと言ってレジ袋を拒否し、非エコの野菜を買う……。こんな事になります。

生産品は商品として販売の段階になると商品のイメージ作りをします。イメージを強調したペットボトル茶があります。

「静岡茶を朝露滴る頃に摘み……」の宣伝文句をボトルに張ってあるメーカーに、「普通は朝露滴る頃に茶摘みはしません」と言ったら、「それはイメージです」と言う事でした。

残留農薬がこわい、と無農薬栽培の食品を選び、平気で殺虫剤を部屋に撒く……アンバランスなことは避けたいものです。

第9回静岡県自費出版奨励賞受賞

奥田万里さん（田野口）

「祖父駒蔵と『メイゾン鴻之巣』」
（川根本町・奥田万里著、かまくら春秋社製作、税込み1260円）

著者の義理の祖父、奥田駒蔵が明治41年、日本橋に小粋なレストラン「メイゾン鴻之巣」を開く経緯や大正時代に入り多くの文人に愛された様子を描いたノンフィクションのほか、随筆21編を収めた。

―7月10日朝報―

奥田さんは10数年前、田野口に移り住んで来た華的な方。実兄はNHKキャスターから、プラネタリウム初代館長の山本肇さん。

第25回とうきょう川根の会総会　6月14日浦安市ブライトンホテルにて

とうきょう川根の会入会希望者は、連絡先（会長へ）
〒233-0013 横浜市港南区
丸山台6-8-30-312
和田良樣さん
TEL. 045-845-4621
まで、お申し込み下さい。

神楽フェスティバルにはこちらに来てね

発足当時150名ほどで始めた、とうきょう川根の会も4半世紀すぎた現在、会員も100名を切りました。今年度は、新しい、若い会員も増え元気をとりもどした様子です。今後も川根本町と東京周辺をつなぐかけ橋として、活動を続けて行きます。関東一円にお住まいの方とうきょう川根の会に入りませんか！同じふる里を持つ会員同志の交流も楽しいものです。是非お願いします。

＊＊＊定期購読のお願い＊＊＊

ふる里通信は有料発行です。
一部　〒共　200円
皆様の定期購読が、この通信の発行をささえます。年間4回の発行を目指しております。そして、目標は100号です。はじめて読まれる方と、購読が切れた方には、郵便振替用紙を同封致します。引き続きお読みいただければ嬉しいです。
1回1回のご送金は、大変ですから1年分800円をご利用下さい。
よろしくお願いします。

発行責任者　〒428-0313
静岡県榛原郡川根本町上長尾859-6
小澤節子
TEL. 0547-56-0015, FAX 56-0020
郵便振替口座 00870-4-81556.

おちゃらか

OCHARAKA

http://www.ocharaka.net/

ダントン ステアァン さん

とうきょう川根の会にゲストとして出席。大の川根茶ファンで、川根茶販売ルートの開拓にも力を入れておられ、出身地のフランスはもちろん、スペインの方へも販売できる樣力を入れてくれています。お店「おちゃらか」はもちろん川根茶から。五月には、尾呂久保の土屋さんへ茶摘み体験ツアー」を実施されました。大きな力となるでしょう。

今年は暦の上でも、太陽系宇宙でも、不思議な現象が多く、興味を持って日々をすごすことも楽しいことです。七月二十二日は皆既日食、日本でも五十年にめぐって来た黒い太陽が見られそうです。この日は、旧暦六月朔日、五月は閏月でしたね。又、八月を中心に土星のリングが見えなくなっています。でも、昼間なので見えませんが、十四年に一度の現象です。